

小学校国語教育における基礎的素養の考察（1） 伝統的言語文化に関わる教材について

鈴木 健一

The consideration of fundamental knowledge in the Japanese
language education of an elementary school (1)

About the teaching materials related to a traditional language culture

Kenichi SUZUKI

平成23年度完全実施の小学校学習指導要領に沿って、小学校教科書に伝統的な言語文化に関わる教材が掲載されている。低学年で昔話や神話、中学年では短歌や俳句とことわざ・慣用句・故事成語、そして高学年での古文や漢文と、数多くの種類の文章や表現が挙げられている。どういうものが採られているのか、具体的にとらえてみたい。

また、本学の小学校教員志望者の伝統的な言語文化教材への認識はどうか、彼らに現実的に求められている伝統的な言語文化に関する基礎的な素養とはどのようなものかを探っていきたい。

本稿は、第一段階として、「教材」に絞って上記の課題を考えたものである。

1 はじめに

平成20年に改訂された小学校学習指導要領が、23年度に完全実施となった。そこでは、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が、従前の〔言語事項〕にかわって新たに設定されている。

中学校段階から、親しむものとして始められていた古典の学習が、小学校から行われることになり混乱もあったが、すでに現場では、23年度より前からこの事項の指導の在り方が考えられ、多くの提案や実践報告がなされてきた¹⁾。

ところで、本学の入試科目に古典は含まれていない。したがって、小学校教諭を目指す学生がどの程度の知識を有して入学してきているかは、ほとんど分からない。教員を育てる立場にある大学として、学生の状況（意識や能力）を把握し、どう対応していくべきかを考えていく必要がある。

2 学習指導要領における伝統的な言語文化

学習指導要領の国語科改訂の要点の項に、次のように示されている²⁾。

(5) 伝統的な言語文化に関する指導の重視

伝統的な言語文化は、創造と継承を繰り返しながら形成されてきた。それらを小学校から取り上げて親しむようにし、我が国の言語文化を継承し、新たな創造へとつないでいくことができるよう内容を構成している。例えば、低学年では昔話や神話・伝承など中学年では易しい文語調の短歌や俳句、慣用句や故事成語、高学年では古文・漢文などを取り上げている。

また、各学年における伝統的な言語文化に関する指導事項は、以下のように整理されている³⁾。

第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
(ア) 昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。	(ア) 易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。 (イ) 長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。	(ア) 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。 (イ) 古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。

3 教科書教材

小学校国語の教科書は、5社によって発行されている。これらに採られている伝統的な言語文化に関する教材は、次のように整理することができる。(表中の太字のものが教材。他領域に配当されていても、内容や表記の面から伝統的な言語文化の教材と言えると判断したものは含めている。また表記は掲載されている通りにした。)

小学校国語教育における基礎的素養の考察(1) 伝統的言語文化に関わる教材について

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
学校図書	<p>むかしばなしを よもう (一上) 「うみの 水は なぜ しょっぱい」 (内容省略)</p> <p>むかしの物語をたのしもう (二上) 「ヤマタノオロチ」 (内容省略)</p> <p>ようすを思いうかべよう (二下) 「かさこじぞう」 (内容省略)</p>	<p>言葉のリズムを感じてみよう (三上) 「ふる池や 蛙飛びこむ 水の音」 「夏河を 越すうれしさよ 手に草履」 「名月を取ってくれろと 泣く子かな」 「雪の朝 二の字二の字の 下駄のあと」</p> <p>言葉から風景を想像しよう (四上) 「田子の浦に うち出でて見れば 白妙の 富士の高嶺に 雪は降りつつ」 「大江山 生野の道の 遠ければ まだふみも見ず 天の橋立」 「嵐吹く 三室の山の もみじ葉は 竜田の川の 錦なりけり」 「ほととぎす 鳴きつ方を ながむれば ただ有明の 月ぞ残れる」</p> <p>言葉のいずみ (四下) ことわざ 「鵜のまねをするからす」 「石の上にも三年」 「こまった時の神だのみ」 「雨だれ石をうがつ」 「ちりも積もれば山となる」 「帯に短したすきに長し」 「暑さ寒さもひがんまで」 「花よりだんご」「毒をくらわば皿まで」 「急がば回れ」「犬も歩けばぼうに当たる」 「馬の耳に念仏」「猫に小判」 「にがした魚は大きい」「泣きっ面に蜂」 「立つ鳥あとをにごさず」</p> <p>故事成語 「五十歩百歩」「蛇足」「矛盾」 「螢雪の功」「一刻千金」「温故知新」</p> <p>慣用句 「ねこのひたい」「ねこの手も借りたい」 「目を丸くする」「へそが茶をわかす」 「頭から湯気」「息を殺す」 「身を粉にする」「こおどりする」 「あわを食う」「図に乗る」 「目を光らす」「鼻が高い」 「口がすべる」「かたを落とす」 「まな板のこい」「すずめのなみだ」 「票を読む」</p>	<p>言葉の文化に親しもう (五上) 「わたの原 八十島かけて こぎ出でぬと 人には告げよ あまの釣船」</p> <p>「御門」さて、なにも書きたらん物は、よみてんや」と、おほせられければ、「なににても、よみさぶらひなん」と申しければ、かたかなのねもじを十二書かせたまひて、「よめ」とおほせられければ、「ねこの子のこねこ しゝの子の子しし」とよみたりければ、御門ほゝゑませたまひて、事なくてやみにけり」</p> <p>随筆を書こう 「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、少し明かりて、むらさきだちたる雲の細くたなびきたる。 夏は夜。(中略) 秋は夕暮れ。(中略) 冬はつとめて。(中略) 火をけの火も白き灰がちになりてわろし。」</p> <p>短歌・俳句を作ろう (五下) 「この里に 手まりつきつつ 子どもらと 遊ぶ春日は 暮れずともよし」</p> <p>言葉のリズムやひびきを楽しもう(六上) 「名も知らぬ遠き島より 流れ寄るやしの実一つ ふるさとの岸をはなれて なれはそも波にいく月 (中略) 思ひやる八重の潮々 いつれの日にか国に帰らん」</p> <p>尋胡隠君 高啓 渡水復渡水 看花還看花 春風江上路 不覺到君家</p>
光村図書	<p>第1学年及び第2学年</p> <p>「おむすび ころりん」(一上) (内容省略)</p> <p>きいて たのしもう (一下) 「まの いい りょうし」 (内容省略)</p>	<p>第3学年及び第4学年</p> <p>声に出して楽しもう 言葉 (三上) 「かすみたつ ながきはるひに こどもらと てまりつきつつ このひくらしつ」 「むしのねも のこりすくなになりけり よなよなかぜの さむくしなれば」 「古池や蛙飛びこむ 水の音」</p>	<p>第5学年及び第6学年</p> <p>声に出して楽しもう 言葉 (五) 竹取物語 「今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。</p>

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
光 村 図 書	おはなしを たのしもう (一下) 「たぬきの 糸車」 (内容省略)	「閑さや岩にしみ入る蟬の声」 「菜の花や月は東に日は西に」 「春の海終日のたりのたりかな」 「やれ打つな蠅が手をすり足をする」 「雪とけて村いつばいの子どもかな」	その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてあたり。」
	きいて たのしもう (二上) 「いなばの 白うさぎ」 (内容省略)	「いろは歌」を読んでみましょう。 「いろはにほへと ちりぬるを わかよたれそ つねならむ うゑのおくやま けふこえて あさきゆめみし ゑひもせす」	枕草子 「春はあけぼの。 やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。 夏は夜。月のころはさらなり、やみもなほ、蛍の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。」
	きせつのことば たのしい冬 (二下) いろはかるた 「犬も歩けばぼうに当たる」 「ろんよりしょうこ」 「花よりだんご」	聞いて楽しもう (三上) 「ばけくらべ」 (内容省略)	平家物語 「祇園精舎の鐘の声、 諸行無常の響きあり。 沙羅双樹の花の色、 盛者必衰の理をあらはす。 おごれる人も久しからず、 ただ春の夜の夢のごとし。 たけき者もつひには滅びぬ、 ひとへに風の前の塵に同じ。」
	十二支 「ね うし とら う たつ み うま ひつじ さる とり いぬ い」	きせつの言葉 夏の楽しみ (三上) 「うれしさや七夕竹の中を行く」	
	春の七草 「せり はずな ごぎょう はこべら ほとけのざ すずな すずしろ」	きせつの言葉 秋の楽しみ (三上) 「名月を取つてくれろとなく子かな」	季節の言葉 夏の日 (五) 「夕立の雲もとまらぬ夏の日のかたぶく山に日ぐらしの声」 「雲の峰いくつ崩れて月の山」 「涼風や青田の上の雲のかけ」
	聞いてたのしもう (二下) 「三まいのおふだ」 (内容省略)	秋の七草 「はぎ すすき くず おみなえし ふじばかま ききょう なでしこ」	古典の世界 (五) 高名の木登り 「高名の木登りといひし男、人をおきてて、高き木に登せて、こずえを切らせしに、いと危く見えしほどは、言ふこともなくて、降るる時に、軒たけばかりになりて、「あやまちすな。心して降りよ。」と、言葉をかけはべりしを、「かばかりになりては、飛び降るとも降りなん。いかにかく言ふぞ。」と申しはべりしかば、「そのことにさうらふ。目くるめき、枝危きほどは、己が恐れはべれば、申さず。あやまちは、安き所になりて、必ずつかまつることにさうらふ。」と言ふ。」
		声に出して楽しもう 言葉 (三下) 「荒海や佐渡によこたふ天の河」 「さみだれや大河を前に家二軒」 「瘦せ蛙まけるな一茶これにあり」 「久方の光のどけき春の日に 静心なく花の散るらむ」 「天の原振りさけ見れば春日なる 三笠の山に出でし月かも」	
		百人一首を楽しもう (三下) 「人はいさ心も知らず古里は 花ぞ昔の香ににほひける」 「いにしへの奈良の都の八重桜 けふ九重ににほひぬるかな」 「花の色は移りにけりないたづらに 我が身世にふるながめせしまに」 「春過ぎて夏来にけらし白妙の 衣干すてふ天の香具山」 「夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを 雲のいつこに月宿るらむ」 「秋の田の仮庵の庵の苫をあらみ 我が衣手は露にぬれつつ」	声に出して読もう 言葉 (五) 「子曰く、「己の欲せざる所は、人に施すこと勿かれ。」と。」

小学校国語教育における基礎的素養の考察(1) 伝統的言語文化に関わる教材について

光 村 図 書	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
		<p>「秋風にたなびく雲の絶え間より もれ出づる月の影のさやけさ」 「白露に風の吹きしく秋の野は 貫きとめぬ玉ぞ散りける」 「きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに 衣片敷き独りかも寝む」 「嵐吹く三室の山のもみち葉は 竜田の川の錦なりけり」 「心当てに折らばや折らむ初霜の 置きまどはせる白菊の花」 「朝ぼらけ有明の月と見るまでに 吉野の里に降れる白雪」 「夜をこめて鳥の空音ははかるとも よに逢坂の関は許さじ」 「めぐり逢ひて見しやそれとも分かぬ間に 雲隠れにし夜半の月かな」 「天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよ をとめの姿しばしとどめむ」 「大江山いく野の道の遠ければ まだふみも見ず天の橋立」 「忍ぶれど色に出でにけり我が恋は 物や思ふと人の問ふまで」 「淡路島通ふ千鳥の鳴く声に 幾夜寝覚めぬ須磨の関守」 「風そよぐ檜の小川の夕暮れは 禊ぞ夏ものしるしなりける」 「奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の 声聞く時ぞ秋は悲しき」 「あらざらむこの世のほかの思ひ出に いまひとたびのあふこともがな」 「村雨の露もまだ干ぬまきの葉に 霧立ち昇る秋の夕暮れ」 「住の江の岸に寄る波よるさへや 夢の通ひ路人目よくらむ」 「吹くからに秋の草木のしをるれば むべ山風をあらしと言ふらむ」 「寂しさに宿を立ち出でてながむれば いづくも同じ秋の夕暮れ」 「ほととぎす鳴きつる方をながむれば いづくも同じ秋の夕暮れ」 「瀬を早み岩にせかる滝川の われても末に逢はむとぞ思ふ」</p> <p>させつの言葉 冬の楽しみ(三下) 「初雪や一二三四五六人」</p> <p>させつの言葉 夏近し(四上) 「折々は腰たたきつつつむ茶かな」</p> <p>声に出して楽しもう 言葉(四上) 「雀の子そこのけそこのけ御馬が通る」 「夏河を越すうれしさよ手に草履」 「名月や池をめぐりて夜もすがら」</p>	<p>「子曰く、「過ちて改めざる、是を過 ちと謂ふ。」と。」 「子曰く、「学びて思はざれば、則ち 罔し。思ひて学ざれば、則ち殆し。」 と。」</p> <p>季節の言葉 春は、あたたか(六) 春暁 孟浩然 「春眠 暁を覚えず 処処 啼鳥を聞く 夜来 風雨の声 花落つこと 知る多少」</p> <p>「春宵一刻値千金」 「子等は皆貝を拾ふといで行きて 磯のはたごや屋静かなり」 「故郷やどちらを見て山笑う」</p> <p>伝統文化を楽しもう(六) 「狂言 柿山伏」 (内容省略)</p> <p>聞きて楽しもう(六) 「河鹿の屏風」</p> <p>季節の言葉 夏は、暑し(六) 「暑き日を海にいれたり最上川」 「夕立が洗つていつた茄子をもぐ」 「日焼け顔見合ひてうまし氷水」 「炎天の地上花あり百日紅」</p> <p>短歌を作ろう(六) たのしみは 「たのしみは妻子むつまじくうちつどひ 頭ならべて物をくふ時」 「たのしみは屋寝目ざむる枕べに ことこと湯の煮えてある時」 「たのしみは朝おきいでて昨日まで 無かりし花の咲ける見る時」</p> <p>「とんぼ」の俳句を比べる(六) 「蜻蛉やとりつきかねし草の上」 「肩に来て人懐かしや赤蜻蛉」 「大空にとどまつてをる蜻蛉かな」 「とどまればあたりにふゆる蜻蛉かな」</p> <p>季節の言葉 秋は、人恋し(六) 静夜思 李白 「牀前月光を見る 疑ふらくは是れ地上の霜かと 頭を挙げて山月を望み 頭を低れて故郷を思ふ」 「見わたせば花も紅葉もなかりけり</p>

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
光村図書		<p>「君がため春の野に出でて若菜摘む 我が衣手に雪は降りつつ」 「田子の浦に打ち出でて見れば白妙の 富士の高嶺に雪は降りつつ」 「これやこの行くも帰るも別れては 知るも知らぬも逢坂の関」</p> <p>季節の言葉 秋深し（四下） 「稲かれば小草に秋の日のあたる」</p> <p>声に出して楽しもう 言葉（四下） 「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」 「桐一葉日当たりながら落ちにけり」 「咳の子のなぞなぞあそびきりもなや」 「ふるさとの山に向かひて 言ふことなし ふるさとの山はありがたきかな」 「金色のちひさき鳥のかたちして 銀杏ちるなり夕日の岡に」 「ゆく秋の大和の国の薬師寺の 塔の上なる一ひらの雲」</p> <p>季節の言葉 春立つ（四下） 「袖ひちてむすびし水のこぼれるを 春立つけふの風やとくらん」 「雪解けや春立つ一日あたたかし」</p> <p>聞いて楽しもう（四下） 「額に柿の木」 （内容省略）</p> <p>知ると楽しい「故事成語」 「蛇足」 「五十歩百歩」</p>	<p>浦の苦屋の秋の夕暮れ」 「ちる芒寒くなるのが目にみゆる」 「秋深き隣は何をする人ぞ」</p> <p>声に出して楽しもう 言葉（六） 天地の文 福澤諭吉 「天地日月。東西南北。きたを背に 南に向かひて右と左に指させば、 ひだりは東、みぎはにし。日輪、 朝は東より次第にのぼり、暮れは またにしに没して、夜くらし。一 昼一夜変わりなく、界を分けし午 前午後、前後合わせて二十四時、 時をあつめて日を計へ、日数つも りて三十の数に満つれば一か月、 大と小とにかかはらず、あらまし 分けし四週日、一週日の名目は日 月火水木金土、一七日に一新し、 一年五十二週日、第一日の一日は 年たち回る時なれど、春の初めは 尚遅く初めて来る第三月、春夏秋 冬三月づつ合わせて三百六十日、 一年一年又一年、百年三万六千日、 人生わづか五十年、稚き時に怠た らば老いて悔ゆるも甲斐なかるべ し。」</p> <p>古人のおくり物（六） *次の作品の部分的な紹介 狂言一話のおもしろさ— 「附子」 「神鳴」 「二人袴」</p> <p>落語一語りのおもしろさ— 「寿限無」</p>
三省堂	<p>第1学年及び第2学年</p> <p>むかしばなしをたのしもう（一） 「いなばの 白ウサギ」 （内容省略）</p> <p>むかし話を楽しもう（二年） 「かさこじぞう」 （内容省略）</p> <p>昔話を知ろう（学びをひろげる 二年） 「ももたろう」 「ももたろうさん、こしにつけ たきびだんごを一つください な。」「いいよ、その代わりに、いっ しょにおにをたい治にいこう。」</p>	<p>第3学年及び第4学年</p> <p>声に出して読もう一俳句（三年） 「古池やかはづとびこむ水の音」 「さみだれを集めて早し最上川」 「なの花や月は東に日は西に」 「ぼたんちりてうち重なりぬ二三ぺん」 「やせがへる負けるな一茶これにあり」 「雪とけて村いっばいの子どもかな」 「かき食えばかねが鳴るなり法隆寺」 「いくたびも雪のふかさをたづねけり」</p> <p>読書の時間（学びをひろげる 三年） 「星取り」 「いろは歌」 「竹取物語」</p>	<p>第5学年及び第6学年</p> <p>「狂言「しびり」」（五年） （内容省略）</p> <p>読書の時間（学びをひろげる 五年） 「まんじゅうこわい」</p> <p>漢詩 絶句 「江碧鳥逾白 山青花欲然 今春看又過 何日是帰年」</p>

小学校国語教育における基礎的素養の考察(1) 伝統的言語文化に関わる教材について

三省堂	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
	<p>おにが島に着いたももたろうたちは、たくさんのおにたちに勇かに立ち向かっていきました。</p> <p>ももたろうは、たから物をたくさん持って、おじいさんとおばあさんのももに帰ってきました。」</p> <p>「さるかに合戦」*一部の紹介 「かにさんのかたき！」うすが屋根の上から、どすん！と落ちてきました。」</p> <p>「ぶんぶく茶釜」*一部の紹介 「おじいさんが店の戸を開けると、そこに見事な茶がまが一つ、置いてありました。」</p> <p>「花さかじいさん」*一部の紹介 「おじいさんが、かれ木の上からはいをまくと、たちまちさくらの花が一面にさきました。」</p> <p>「遊び」の昔(学びをひろげる 二年) *絵による紹介 「草花遊び」 「竹とんぼ」 「玉打ち遊び」 「こま」 「組上絵」 「ままごと」 「竹馬」 「羽子板」 「貝合わせ」 「双六」</p>	<p>絵巻物を知ろう(学びをひろげる 三年) *次の作品の一部を絵と説明で 「鳥獣人物戯画」 「鼠の草紙」 「長谷雄草紙」</p> <p>声に出して読もう—短歌(四年) 「東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ」 「ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」 「いにしへの奈良の都の八重ざくらけふ九重にほひぬるかな」 「箱根路をわれこえくれば伊豆の海やおきの小島に波のよる見ゆ」 「かすみ立つ長き春日に子どもらと手まりつきつつこの日くらしつ」 「楽しみはまれに魚にて子らみながうましうましと言ひて食ふ時」 「夏のかぜ山よりきたり三百の牧のわか馬耳吹かれけり」</p> <p>想ぞうをふくらませよう(四年) 故事成語の物語 「漁夫の利」 (内容省略)</p> <p>読書の時間(学びをひろげる 四年) 小倉百人一首 「春すぎて 夏来にけらし 白たえの衣ほすちよう 天の香具山」 「田子の浦に うちいでて見れば 白たえの富士のたかねに 雪は降りつつ」 「天の原 ふりさけ見れば 春日なる三笠の山に いでし月かも」</p> <p>浦島太郎 *冒頭の亀を助けて海に帰す部分 「昔、丹後国に 浦島という者はべりしに、その子に 浦島太郎と申して、年のよわい 二十四、五のおのこ ありけり。 明け暮れ、海のうろくずを取りて、父母を養いけるが、ある日の つれづれに、つりをせんとて いでにけり。(中略) とて、このかめを もとの海に 返しける。」</p> <p>落語を知ろう(学びをひろげる 四年) *次の作品の一部を解説 「初天神」 「長屋の花見」 「じゅげむ」</p>	<p>春暁 「春眠不覚暁 処処聞啼鳥 夜来风雨声 花落知多少」</p> <p>平家物語 「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のこころをあらわす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者もついには滅びぬ、ひとえに風の前のちりに同じ。」</p> <p>能・狂言を知ろう(学びをひろげる 五年) *写真による説明</p> <p>声に出して読もう—漢文(六年) 「学びて時にこれを習う、亦た説ばしからずや。 朋あり、遠方より来たる、亦た楽しからずや。」 「吾れ日に三たび吾が身を省みる。」 「故きを温めて新しきを知る、以て師と為るべし。」 「仁者は必ず勇有り。勇者は必ずしも仁有らず。」 「己の欲せざる所は人に施すこと勿かれ。」</p> <p>体を使った言葉(学びを広げる 六年) 「鼻をあかす」「鼻をうごめかす」 「鼻をつく」「鼻をならす」 「鼻にかける」「鼻につく」 「鼻がきく」「鼻が高い」 「耳が痛い」「耳が早い」 「耳を疑う」「耳を傾ける」 「耳につく」「耳に入れる」 「目が覚める」「目がくらむ」 「目が回る」「目が肥える」 「目が高い」「目を覆う」 「目を疑う」「目を丸くする」 「目をつぶる」「目を通す」 「目を離す」「目に浮かぶ」 「目に触れる」「目に留まる」 「口が堅い」「口がすべる」 「口が酸っぱくなる」「口が悪い」 「口がうまい」「口がおごる」 「口をとがらせる」「口をきく」 「口を出す」「口を開く」 「口をはさむ」「口に合う」 「口にする」「口に上る」</p>

三省堂	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
			<p>「頭が痛い」「頭が上がらない」 「頭が重い」「頭が低い」 「頭が下がる」「頭を抱える」 「頭をひねる」「頭を下げる」 「頭を痛める」「頭をもたげる」 「頭を冷やす」「頭をかすめる」 「頭に入れる」「頭に来る」 「頭に血が上る」 「手が空く」「手がふさがる」 「手がつけられない」 「手が出ない」「手が届く」 「手がかかる」「手をかける」 「手をつける」「手を広げる」 「手に入れる」「手に負えない」 「手に余る」「手につかない」 「手に汗を握る」 「胸が痛む」「胸がすく」 「胸がつぶれる」 「胸がいっぱいになる」 「胸が張り裂けそう」 「胸を痛める」「胸を打つ」「胸を張る」 「胸を反らす」「胸をなで下ろす」 「胸に刻む」「胸に迫る」 「足が鈍る」「足が重い」 「足を運ぶ」「足を引っばる」</p> <p>読書の時間(学びを広げる 六年) 枕草子 「うつくしきもの。うりにかきたるちごの顔。(中略) 頭は尼そぎなるちごの、目に髪の毛の覆えるを、かきはやらで、うちかたぶきて物など見たるも、うつくし。」</p> <p>徒然草 「八つになりし年、父に問いていわく、「仏はいかなるものにか候うらん。」 と言う。父がいわく、「仏には、人のなりたるなり。」と。(中略) 諸人に語りて興じき。」</p> <p>おくのほそ道 「月日は百代の過客にして、行きこう年もまた旅人なり。(中略) 面八句をいおりの柱に懸け置く。」</p> <p>「草の戸も 住み替わる代ぞ ひなの家」 「夏草や兵どもが夢の跡」 「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」 「荒海や佐渡によこたう天の河」</p> <p>歌舞伎・文楽を知ろう(学びを広げる 六年) * 写真による説明</p>

小学校国語教育における基礎的素養の考察(1) 伝統的言語文化に関わる教材について

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
教育出版	<p>むかしの おはなしを たのしむ (一下) 「天に のぼった おけやさん」 (内容省略)</p> <p>むかしの お話を 読む (二上) 「いなばの しろうさぎ」 (内容省略)</p> <p>むかしの お話を 楽しむ (二下) 「かさこじぞう」 (内容省略)</p> <p>本の世界を楽しむ 「ないた赤おに」(二下) (内容省略)</p>	<p>日本語のひびきにふれる (三上) 俳句に親しむ 「雪とけて村いっばいの子もかな」 「菜の花や月は東に日は西に」 「はねわっててんとう虫のとびいずる」 「さじなめて童たのしも夏氷」 「荒海や佐渡によことう天河」 「かきくえばかねが鳴るなり法隆寺」 「せきの子のなぞなぞあそびきりもなや」 「うつくしきひよりになりぬ雪のうえ」</p> <p>きせつと言葉(三上) 「八節」 「年中行事」</p> <p>日本の文化に親しむ(三下) ことわざ・慣用句 ことわざ 「さるも木から落ちる」「かつばの川流れ」 「弘法にも筆のあやまり」 「上手の手から水がもれる」 「善は急げ」「急がば回れ」</p> <p>慣用句 「ほねがおれる」「ほねみをけずる」 「ほねやすめ」「ほねみにこたえる」 「頭が上がらない」「頭をかかえる」 「頭をひねる」 「むねがいたむ」「むねがおどる」 「むねがいっばいになる」 「馬が合う」「つるのひと声」「うり二つ」 「水入らず」「水入り」「水ぎわだつ」</p> <p>俳句を讀もう(三下) 「すずめの子そこのけそこのけお馬が通る」 「古池やかわずとびこむ水のおと」 「スリッパをこえかねているこねこかな」 「顔じゅうを蒲公英にしてわらうなり」 「夏川をこすうれしさよ手に草履」 「ひっぱれる糸まつすぐやかぶと虫」 「しずかさや岩にしみいるせみの声」 「青がえるおのれもペンキぬりたてか」 「日やけ顔見合いてうまし氷水」 「名月をとってくれるとなく子かな」 「空遠く声あわせ行く小鳥かな」 「秋の蚊のよろよと来て人をさす」 「名月やたたみの上にまつのかげ」 「赤とんぼ葉末にすがり前のめり」 「スケートのひもむすぶ間もはやりつつ」 「こがらしや海に夕日をふき落とす」 「うまそうな雪がふうわりふうわりと」 「えりまきに首引き入れて冬の月」 「雪の朝二の字二の字のげたのあと」</p>	<p>日本語のひびきを味わう(五上) 漢文に親しむ ・春暁 孟浩然 「春眠 暁を 覚えず 処処に 啼鳥を 聞く 夜来 風雨の 声 花 落つる こと 知る 多少」</p> <p>・静夜思 李白 「牀前 月光を 見る 疑うらくは 是れ 地上の 霜かと 頭を 挙げて 山月を 望み 頭を 低れて 故郷を 思う」</p> <p>「故きを温ねて新しきを知る(『論語』)」 「心焉に在らざれば視れども見えず 聴けども聞こえず食らえども其の 味を知らず(『大学』)」</p> <p>漢文を讀もう(五上) ・春夜 蘇軾 「春宵 一刻 値 千金 花に 清香 有り 月に 陰 有り 歌管 楼台 声 細細 鞦韆 院落 夜 沈沈」</p> <p>・江南の春 杜牧 「千里 鶯啼きて 緑 紅に 映ず 水村 山郭 酒旗の 風 南朝 四百八十寺 多少の 楼台 烟雨の 中」</p> <p>・山亭の夏日 高駢 「緑樹 陰 濃やかにして 夏日 長し 楼台 影を 倒にして 池塘に入る 水精の 簾 動きて 微風 起こり 満架の 薔薇 一院 香し」</p> <p>・論語 「学びて時に之を習う、亦た説ばし からずや。朋の遠方より来たるあ り、亦た樂しからずや」 「吾十有五にして学に志す。三十 にして立つ。四十にして惑わず。 五十にして天命を知る。六十にし て耳順う。七十にして心の欲する 所に従いて矩を踰えず。」</p> <p>日本の文化を考える(五下) 「物語」を楽しむ 「今は昔、竹取の翁といふ者ありけ り。野山にまじりて竹を取りつつ、 よろづのことに使ひけり。名をば、 さぬきの造となむいひける。」</p>

教育出版	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
		<p>日本語のひびきにふれる (四上) 短歌の世界 「東の野にかぎろいの立つ見えて かえり見すれば月かたぶきぬ」 「秋来ぬと目にはさやかに見えねども 風の音にぞおどろかれぬる」 「見わたせば花ももみじもなかりけり 浦の苫屋の秋のタぐれ」 「かすみたつ長き春日に子どもらと 手まりつきつつこの日くらしつ」 「金色のちいさき鳥のかたちして いちようちるなり夕日のおかに」 「たわむれに母を背負いて そのあまりの軽きに泣きて 三歩あゆまず」</p> <p>月の名前 (四上) ・満ち欠けや上る時間による月の呼び方 ・月の異名</p> <p>日本の文化に親しむ (四下) 故事成語 「五十歩百歩」の意味と成り立ち 「漁夫の利」の意味と成り立ち 「螢雪の功」「杞憂」 「とらの威を借るきつね」 「蛇足」「矛盾」</p> <p>本の世界を広げて読む (四下) 「ぞろぞろ—落語」 (内容省略)</p> <p>「百人一首」を読もう (四下) 「あしびきの山鳥の尾のしだり尾の ながながし夜をひとりかもねん」 「田子の浦にうちいでてみれば白妙の 富士の高嶺に雪はふりつつ」 「天の原ふりさけ見れば春日なる 三笠の山にいでし月かも」 「君がため春の野にいでて若菜つむ わが衣手に雪はふりつつ」 「しのぶれど色にいでにけりわがこいは ものや思うと人の問うまで」 「夕されば門田の稲葉おとずれて あしのまるやに秋風ぞふく」 「秋風にたなびく雲のたえまより もれいずる月のかげのさやけさ」 「ほととぎす鳴きつる方をながむれば ただ有明の月ぞ残れる」</p> <p>「寿限無 (落語)」 (内容省略)</p>	<p>その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてあたり。」</p> <p>「祇園精舎の鐘の声、諸行無常のひびきあり。 沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらわす。 おごれる人も久しからず、ただ春の夢のごとし。 たけき者もつひにはほろびぬ、ひとへに風の前のちりに同じ。」</p> <p>「古典」の言葉にふれよう (五下) 「一の巻よりして、人もまじらず、机帳の内にうちふして引きいでつつ見る心地、後の位も何にかはせむ。昼は日ぐらし、夜は目の覚めたる限り、灯を近くともして、これを見るよりほかのことなければ、おのづからなどは、そらにおぼえうかぶをいみじきことに思ふに、…」</p> <p>「いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなききはにはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。」</p> <p>「ある川のほとりに、あり、遊ぶことありけり。にはかに水かさ増さりきて、かのありをさそひ流る。(中略) そのごとく、人の恩を受けたらむ者は、「いかさまにもそのむくひをせばや。」と思ふこころざしをもつべし。」</p> <p>「雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ 丈夫ナカラダヲモチ (中略) サウイウモノニ ワタシハナリタイ」</p> <p>「附子 (狂言)」 (内容省略)</p> <p>日本語のひびきを味わう (六上) 「春はあけぼの。 やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。」</p>

小学校国語教育における基礎的素養の考察（１）伝統的言語文化に関わる教材について

	第 1 学年及び第 2 学年	第 3 学年及び第 4 学年	第 5 学年及び第 6 学年
教育出版			<p>夏は夜。 月のころはさらなり。(中略) 秋は夕暮れ。 夕日のさして山の端いと近う(中略) 冬はつとめて。 雪の降りたるはいふべきにもあらず。 (中略) 火桶の火も、白き灰がちになりて わろし。』</p> <p>伝えられてきた作品 「つれづれなるままに、日暮らし、 すずりに向かひて、心にうつりゆ くよしなしごとを、そこはかとな く書きつくれば、あやしうこそも のぐるほしけれ。」</p> <p>「月日は百代の過客にして、行きかふ 年もまた旅人なり。舟の上に生涯を うかべ、馬の口とらへて老いをむか ふる者は、日々旅にして旅をすみか とす。古人も多く旅に死せるあり。」</p> <p>『アイヌ神脩謡集』（知里幸恵 訳）の紹介 『おもしろそうし』（外間守善 訳）の紹介</p> <p>日本の文化を考える（六下） 「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ば かりして居る。小学校に居る時分 (中略) 弱虫や一い。と嘆したからである。」</p> <p>「或る春の日暮れです。 唐の都洛陽の西の門の下に、ぼんや り空を仰いである、一人の若者が ありました。(中略) まるで画のやうな美しさです。」</p> <p>「いくたびも雪の深さを尋ねけり」 「瓶にさす藤の花ぶさみじかければ たゞみの上にとゞかざりけり」 「くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の 針やはらかに春雨のふる」 「淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば 心もしのに古思ほゆ」</p> <p>日本の名作 「吾輩は猫である。名前はまだ無い。 どこで生まれたか頓と見当がつかぬ。 何でも薄暗い(中略) 吾輩はここで始めて人間といふも のを見た。」</p>

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
教育出版			<p>「越後の春日を経て今津へ出る道を、珍しい旅人の一群が歩いてゐる。母は三十歳を（中略）と云って励まして歩かせようとする。」</p> <p>「或日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、（中略）極楽は丁度朝なのでございましょう。」</p> <p>「小諸なる古城のほとり 雲白く遊子悲しむ （中略） 濁り酒濁れる飲みて 草枕しばし慰む」</p> <p>短歌や俳句を楽しもう 「石走る垂水の上のさわらびの 萌え出づる春になりにけるかも」 「たのしみは まれに魚煮て兎ら皆が うましようましといひて食ふ時」 「芭蕉翁ぼちやんといふと立ち留まり」 「はへば立て立てば歩めの親心」 「まだももは流れてこぬに子はねいり」 「本ぶりになつて出てゆく雨やどり」</p>
東京書籍	<p>第1学年及び第2学年</p> <p>むかしばなしをよんでもらおう（一下） 「花さかじい」 （内容省略）</p> <p>言いつたえれれている お話を しろ（二上） 「でいだらぼっちの お話」 （内容省略）</p> <p>神話の一部の紹介 「いなばの 白うさぎ」 「やまたのおろち」 「海さち 山さち」</p> <p>むかし話を 楽しんで 読もう（二下） 「かさこじぞう」 （内容省略）</p> <p>おばあちゃんに 聞いたよ（二下） 「十二支」 「春の七草」 「小の月」 「いろはうた」</p>	<p>第3学年及び第4学年</p> <p>慣用句を使ってみよう（三上） 「ねこの手もかりたい」「ねこのひたい」 「馬が合う」「さばを読む」「波に乗る」 「雲をつかむ」「朝めし前」「ごまをする」 「うり二つ」「手にあせをにぎる」 「うでが鳴る」「あいづちを打つ」 「ブレーキをかける」「のれんを下ろす」</p> <p>読書の部屋（三上） 「じゅげむ」</p> <p>俳句に親しもう（三下） 「菜の花や月は東に日は西に」 「雪とけて村いっばいの子どもかな」 「山路来て何やらゆかしすみれ草」 「さみだれや大河を前に家二軒」 「明月をとってくれろと泣く子かな」</p> <p>「ことわざブック」を作ろう（四上） 調べてみよう 「さるも木から落ちる」「ねこに小判」 「石に上にも三年」 「えびでたいをつる」 「ちりも積もれば山となる」 「笑う門には福きたる」 「ぬかにくぎ」「良薬は口に苦し」 「飛んで火に入る夏の虫」</p>	<p>第5学年及び第6学年</p> <p>古文を声に出して読んでみよう（五上） 「今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一すじありける。あやしがりて、寄りて見るに、つつの中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてあたり。」</p> <p>「つれづれなるままに、日くらし、すずりに向かひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。」</p> <p>「祇園精舎のかねの声、 諸行無常のひびきあり。 沙羅双樹の花の色、 盛者必衰のこころをあらはす。 おごれる人も久しからず、 ただ春の夢のごとし。 たけき者もつひにはほろびぬ、 ひとへに風の前のちりに同じ。」</p>

小学校国語教育における基礎的素養の考察(1) 伝統的言語文化に関わる教材について

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
東京書籍		<p>「負けるが勝ち」「転ばぬ先のつえ」 「かっぱの川流れ」 「弘法にも筆のあやまり」 「あぶはち取らず」 「二兎を追うものは一兎をも得ず」 「一石二鳥」</p> <p>故事成語について知ろう(四上) 「五十歩百歩」「漁夫の利」「蛇足」</p> <p>「百人一首」を声に出して読んでみよう(四下) 「あらしふく三室の山のもみぢ葉は 竜田の川の錦なりけり」 「春すぎて夏来にけらし白妙の 衣ほすてふ天の香具山」 「田子の浦にうちいでて見れば白妙の 富士の高嶺に雪は降りつつ」 「奥山にもみぢ踏み分け鳴く鹿の 声聞くとときぞ秋は悲しき」 「天の原ふりさけ見れば春日なる 三笠の山にいでし月かも」 「君がため春の野にいでて若菜つむ わが衣手に雪は降りつつ」 「久方の光のどけき春の日に しづ心なく花の散るらむ」 「人はいさ心も知らずふるさは 花ぞ昔の香ににほひける」 「秋風にたなびく雲の絶え間より もれいづる月の影のさやけさ」 「ほととぎす鳴きつる方をながむれば ただ有明の月ぞ残れる」</p>	<p>詩と俳句を味わおう(五上) 「山のあなたの空遠く」 「幸」住むと人のいふ。 ああ、われひとゝ尋めゆきて、 涙さしぐみ、かへりきぬ。 山のあなたになほ遠く 「幸」住むと人のいふ。</p> <p>俳句 「閑さや岩にしみいる蟬の声」</p> <p>古文に親しもう(五下) 「春は、あけぼの。 やうやう白くなりゆく山ぎは、 少し明かりて、紫だちたる雲の細 くたなびきたる。」</p> <p>「九月つごもり、十月のころ、空う ちくもりて、風のいとさわがしく ふきて、黄なる葉どもの、ほろほ ろとこぼれ落つる、いとあはれな り。」</p> <p>「ふるものは、雪。あられ。みぞれは、 にくけれど、白き雪のまじりてふ るをかし。」</p> <p>漢文を読んでみよう(六上) 「百聞は一見にしかず」 「一を聞きて以つて十を知る」 「子曰はく、「故きを温めて新しき を知らば、以つて師となるべし。」 と。」 「一に日はく、和を以つて貴しとし、 さかふること無きをむねとせよ。」</p> <p>・春暁 孟浩然 「春眠暁を覚えず 処処啼鳥を聞く 夜来風雨の声 花落つること知る多少」</p>

*表中の斜字体の注記は筆者による。また、(中略)として、作品の一部を省略している。

以上のように、数多くの作品や表現が教材として挙げられている。さらに、これらをを区分すると、次のようになる。

- ① 昔話・神話 : のべ 26 (異なり 18) 種類。
- ② 短歌 : のべ 89 (異なり 58) 種類。
- ③ 俳句 : のべ 84 (異なり 57) 種類。

- ④ 川 柳 : 4 (異なり 4) 種類。
- ⑤ ことわざ : のべ 38 (異なり 31) 種類。
- ⑥ 慣用句 : のべ 134 (異なり 121) 種類。
- ⑦ 故事成語 : のべ 18 (異なり 8) 種類。
- ⑧ 古文 : のべ 26 (異なり 15) 種類。
- ⑨ 漢詩 : のべ 12 (異なり 7) 種類。
- ⑩ 漢文 : のべ 16 (異なり 12) 種類。
- ⑪ 文語詩・文語文 : 5 (異なり 5) 種類。
- ⑫ 落語 : のべ 9 (異なり 6) 種類。
- ⑬ 狂言 : のべ 6 (異なり 5) 種類。
- ⑭ 代表的な小説 : 5 (異なり 5) 種類。
- ⑮ その他の関連知識 : のべ 19 (異なり 15) 種類。

4 教材の認知度

本学の学生のうち、小学校教諭を目指す学生は、伝統的言語文化の教材として挙げられているものを、どの程度認識しているだろうか。学校図書館の教科書に収められている教材について、認知度の調査を行った。結果は次の通りである。各問についての回答で最も多かった選択肢を下線付き太字で示した。

24年度 調査 結果一覧

対象者 男子 12名 女子 11名 合計 23名

1 昔話や神話

ア よく知っている	イ 少しは知っている	ウ 題は知っている	エ 知らない
-----------	------------	-----------	--------

- | | | | | |
|---------------------|-------------|-----|------------|-------------|
| ① 「うみの 水は なぜ しよっぱい」 | ア 3 | イ 4 | ウ 5 | <u>エ 11</u> |
| ② 「ヤマタノオロチ」 | ア 2 | イ 7 | <u>ウ 8</u> | エ 6 |
| ③ 「かさこじぞう」 | <u>ア 13</u> | イ 3 | ウ 3 | エ 4 |

2 俳句

ア よく知っている	イ 少しは知っている	ウ 見たこと（聞いたこと）はある	エ 知らない
-----------	------------	------------------	--------

- | | | | | |
|-----------------------|------------|-----|-----|-------------|
| ① 「ふる池や 蛙飛びこむ 水の音」 | <u>ア 8</u> | イ 7 | ウ 7 | エ 1 |
| ② 「夏河を 越すうれしさよ 手に草履」 | ア 0 | イ 0 | ウ 7 | <u>エ 16</u> |
| ③ 「名月を 取ってくれろと 泣く子かな」 | ア 0 | イ 2 | ウ 6 | <u>エ 15</u> |
| ④ 「雪の朝 二の字二の字の 下駄のあと」 | ア 0 | イ 1 | ウ 6 | <u>エ 16</u> |

小学校国語教育における基礎的素養の考察(1) 伝統的言語文化に関わる教材について

3 短歌

	ア	イ	ウ	エ
ア よく知っている		イ 少しは知っている	ウ 見たこと(聞いたこと)はある	エ 知らない
①「田子の浦に うち出でて見れば 白妙の 富士の高嶺に 雪は降りつつ」	2	2	4	<u>エ 1 5</u>
②「大江山 生野の道の 遠ければ まだふみも見ず 天の橋立」	0	1	9	<u>エ 1 3</u>
③「嵐吹く 三室の山の もみじ葉は 竜田の川の 錦なりけり」	1	0	6	<u>エ 1 6</u>
④「ほととぎす 鳴きつる方を ながむれば ただ有明の 月ぞ残れる」	0	4	6	<u>エ 1 3</u>
⑤「わたの原 八十島かけて こぎ出でぬと 人には告げよ あまの釣船」	1	1	4	<u>エ 1 7</u>
⑥「この里に 手まりつきつつ 子どもらと 遊ぶ春日は 暮れずともよし」	0	1	4	<u>エ 1 8</u>

4 ことわざ・慣用句・故事成語

(1) ことわざ

	ア	イ	ウ	エ
ア よく知っている		イ 少しは知っている	ウ 見たこと(聞いたこと)はある	エ 知らない
①「鶉のまねをするからす」	2	5	7	<u>エ 9</u>
②「石の上にも三年」	<u>ア 1 7</u>	4	2	エ 0
③「こまった時の神だのみ」	<u>ア 1 2</u>	7	2	エ 2
④「雨だれ石をうがつ」	3	4	<u>ウ 9</u>	エ 7
⑤「ちりも積もれば山となる」	<u>ア 2 1</u>	2	0	エ 0
⑥「帯に短したすきに長し」	<u>ア 9</u>	3	2	<u>エ 9</u>
⑦「暑さ寒さもひがんまで」	6	<u>イ 7</u>	6	エ 4
⑧「花よりだんご」	<u>ア 1 9</u>	3	1	エ 0
⑨「毒をくらわば皿まで」	7	1	5	<u>エ 1 0</u>
⑩「急がば回れ」	<u>ア 2 2</u>	1	0	エ 0
⑪「犬もあるけばぼうに当たる」	<u>ア 2 2</u>	1	0	エ 0
⑫「馬の耳に念仏」	<u>ア 2 2</u>	0	1	エ 0
⑬「猫に小判」	<u>ア 2 0</u>	2	1	エ 0
⑭「にがした魚は大きい」	<u>ア 1 6</u>	2	4	エ 1
⑮「泣きつ面に蜂」	<u>ア 1 6</u>	3	3	エ 1
⑯「立つ鳥あとをにごさず」	<u>ア 1 1</u>	5	5	エ 2

(2) 故事成語

	ア	イ	ウ	エ
ア 意味も由来も知っている		イ 意味は知っている	ウ 見たこと(聞いたこと)はある	エ 知らない
①「五十歩百歩」	6	<u>イ 1 0</u>	7	エ 0
②「蛇足」	<u>ア 1 4</u>	6	2	エ 1
③「矛盾」	<u>ア 1 9</u>	3	1	エ 0
④「螢雪の功」	3	6	5	<u>エ 9</u>
⑤「一刻千金」	3	<u>イ 1 0</u>	5	エ 5
⑥「温故知新」	5	<u>イ 9</u>	4	エ 5

研究紀要 第35号

(3) 慣用句

ア よく知っている イ 少しは知っている ウ 見たこと（聞いたこと）はある エ 知らない

① 「ねこのひたい」	ア 4	イ 4	ウ 6	エ <u>9</u>
② 「ねこの手も借りたい」	<u>ア 17</u>	イ 5	ウ 0	エ 1
③ 「目を丸くする」	<u>ア 17</u>	イ 5	ウ 1	エ 0
④ 「へそが茶をわかす」	<u>ア 9</u>	イ 6	ウ 7	エ 1
⑤ 「頭から湯気」	<u>ア 8</u>	イ 5	ウ 6	エ 4
⑥ 「息を殺す」	<u>ア 17</u>	イ 4	ウ 2	エ 0
⑦ 「身を粉にする」	<u>ア 11</u>	イ 8	ウ 2	エ 2
⑧ 「こおどりする」	ア 2	イ 5	ウ 7	<u>エ 9</u>
⑨ 「あわを食う」	ア 5	<u>イ 8</u>	ウ 4	エ 6
⑩ 「囷に乗る」	<u>ア 16</u>	イ 4	ウ 3	エ 0
⑪ 「目を光らす」	<u>ア 15</u>	イ 4	ウ 4	エ 0
⑫ 「鼻が高い」	<u>ア 17</u>	イ 5	ウ 1	エ 0
⑬ 「口がすべる」	<u>ア 20</u>	イ 3	ウ 0	エ 0
⑭ 「かたを落とす」	<u>ア 18</u>	イ 4	ウ 0	エ 1
⑮ 「まな板のこい」	<u>ア 8</u>	イ 5	ウ 7	エ 3
⑯ 「すずめのなみだ」	<u>ア 11</u>	イ 5	ウ 5	エ 2
⑰ 「票を読む」	ア 2	イ 4	ウ 8	<u>エ 9</u>

5 古文（作品の一部）・文語詩・漢詩

別紙に掲げたAからDまでの作品について答えてください。

(A: 「小野篁広才の事」(宇治拾遺物語) B: 枕草子冒頭部 C: 文語詩「やしの実」 D: 漢詩「尋胡隱君」)

ア よく知っている イ 少しは知っている ウ 見たこと（聞いたこと）はある エ 知らない

A 「御門「さて、なにも…」」	ア 0	イ 2	ウ 3	エ <u>18</u>
B 「春はあけぼの。…」	ア 6	<u>イ 10</u>	ウ 6	エ 1
C 「名も知らぬ…」	ア 0	イ 1	ウ 7	<u>エ 15</u>
D 「水を渡り…」	ア 0	イ 1	ウ 5	<u>エ 17</u>

5 教員採用試験における出題

千葉県・千葉市の教員採用試験に、伝統的な言語文化に関する出題があるかどうかを調べてみた。

2011～2013年度の3年分の実施問題を調査した。小学校全科の問題には、関連する問題は見あたらない。しかし、教職・一般教養の問題には、次のような設問があった。

2011年度 出題無し

2012年度 出題有り

万葉集の説明としてふさわしくないものを選ぶ。

- ①万葉集は、四千五百余首の歌が集められた、現存する日本最古の歌集である。
- ②天皇から庶民の歌まで納められ、歌風は素朴でおおらかである。
- ③歌の種類として、短歌以外に長歌、旋頭歌等も入り、幅の広さがある。
- ④七五調のリズムが力強さを出し、ますらおぶりといわれる。
- ⑤表記としては、漢字を利用した万葉仮名が使われ、平仮名は使われていない。

2013年度 出題有り

芭蕉の句ではないものを選ぶ。

- ・古池や蛙飛びこむ水の音
- ・名月や池をめぐりて夜もすがら
- ・夏草や兵どもが夢の跡
- ・菜の花や月は東に日は西に
- ・閑かさや岩にしみ入る蟬の声

6 考察

(1) 明らかになったこと

① 数多くの教材のなかで特に注目すべきものがある。

5社の教材の量や内容を単純に比較することはできないが、複数の出版社で採り上げられているものに注目したい。一つの考え方として、3社以上で採り上げられている教材は、教える立場に立つ者が基本的なものとしてしっかり認識すべきだと言える。それらは、次のような教材である。

◎：5社全てで採られているもの ○：4社で採られているもの ●：3社で採られているもの
〔昔話・神話〕

- 「かさこじぞう」
- 「いなばの白うさぎ」

〔短歌〕

- 「田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ」
- 「ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残れる」
- 「天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも」
- 「嵐吹く三室の山のもみぢ葉は竜田の川の錦なりけり」
- 「かすみ立つながき春日に子どもらとてまりつきつつこの日暮らしつ」
- 「久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」
- 「春過ぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山」
- 「秋風にたなびく雲の絶え間よりもれ出づる月の影のさやけさ」
- 「君がため春の野に出でて若菜摘むわが衣手に雪は降りつつ」

〔俳句〕

- 「古池や蛙飛び込む水の音」
- 「名月を取つてくれろと泣く子かな」
- 「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」
- 「菜の花や月は東に日は西に」
- 「雪とけて村いつぱいの子どもかな」
- 「夏河を越すうれしさよ手に草履」
- 「荒海や佐渡によこたふ天の河」
- 「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」

〔故事成語〕

- 「五十歩百歩」
- 「蛇足」
- 「漁夫の利」

〔古文〕

- 「枕草子」の冒頭の部分
- 「竹取物語」の冒頭の部分
- 「平家物語」の冒頭の部分

〔漢詩〕

- 「春暁」

〔漢文〕

- 「故きを温ねて新しきを知る。」

〔落語〕

- 「寿限無」

② 学生の認識度が低いものがある。

前掲の調査結果の通り、教材の認識度は教材の領域によって差が見られた。全般的に認識度の高かったのは、「ことわざ」「故事成語」「慣用句」であった。一方、低かったものは、「俳句」「短歌」「文語詩」「漢詩」であった。「昔話や神話」は、作品によって分かれ、どちらとも言えないと判断した。

前項で抽出した3社以上で採られている教材と、今回の調査教材が重なっているものは、次の教材である。認識度と合わせて整理してみると、

教 材	認識度
「かさこじぞう」(昔話)	高
「古池や蛙飛び込む水の音」(俳句)	高
「夏河を越すうれしさよ手に草履」(俳句)	低
「名月を取つてくれろと泣く子かな」(俳句)	低
「田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ」(短歌)	低
「嵐吹く三室の山のもみち葉は竜田の川の錦なりけり」(短歌)	低
「ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残れる」(短歌)	低
「五十歩百歩」(故事成語)	高
「蛇足」(故事成語)	高
「温故知新」(故事成語)	高
『枕草子』冒頭(古文)	高

となり、芭蕉の俳句「古池や蛙飛び込む水の音」を除いて、他の俳句や短歌の認識度が低い。それも半数以上の者が「知らない」と回答している。本学の学生が取り組んでいかなければならない課題の一つが、ここに現れていると言えよう。

③ 採用試験も視野に入れていかねばならない。

千葉県・千葉市の小学校教員採用試験の教職・一般教養の問題の中に、伝統的な言語文化に関わる設問が出現してきた。万葉集の特徴や芭蕉の俳句についての出題は専門的な深い知

識が必要とされるものではないが、授業で扱う立場から必要と思われる程度の知識は身に付けさせていかねばならない。

(2) 今後の研究課題

① 教材の範囲を広げて認識度を調査する。

学校図書の教科書所収の伝統的な言語文化に関わる教材について認識度調査をしたが、さらに拡げて調べてみる必要があるだろう。その一つは、他の出版社の教科書に収められている教材についての調査である。全体にわたる調査がこれで調うことになる。もう一つは、3社以上の教科書に採られている教材に限った調査である。何を基礎的なものとするかの検討は当然必要であるが、多く採用されていることの意味を考え、それらに限った調査の結果も得ておきたい。

② 「用語」の観点から分析していく。

伝統的な言語文化に関わる教材には、歴史的仮名遣いはもちろん、現在の私たちが使用しない語や語の用法が含まれている。また、古今異義語も存在する。教科書所収の各教材に出現する用語に着目し、教材を理解したり指導を進めたりしていく際に留意しなければならない用語を探っていきたい。

7 注、引用、参考文献等

1) 『教育科学 国語教育』の平成20年～22年の増刊号を含めた刊行分では、次のような数の提言や実践報告が掲載されている。

平成20年1月～12月号 35編

「百人一首カルタ」作りで古典に親しむ」など。

平成21年1月～12月号 23編

「昔話の読み聞かせから、読解力の向上をめざした取り組み」など。

平成22年1月～12月号 58編

「暗唱で文語調の詩文や俳句や短歌に慣れ親しませる授業」など。

2) 『小学校学習指導要領解説 国語編』2011 東洋館出版社 p 7～8

3) 同上書 p 24

- ・『みんなと学ぶ小学校国語』一年～六年 平成23年度版 学校図書
- ・『国語』小学校国語科用 一～六 平成23年度版 光村図書
- ・『小学生の国語』一年～六年 平成23年度版 三省堂
- ・『小学生の国語 学びを広げる』二年～六年 平成23年版 三省堂
- ・『ひろがる言葉 小学国語』1～6 平成23年度版 教育出版
- ・『新しい国語』一～六 平成23年度版 東京書籍